

ペダル初学者を対象としたペダル学習についての研究
～教材作成と活用実践を通して～

音楽内容学領域

徳弘華奈子

筆者は現在ピアノを指導する立場にも身をおいているが、生徒にはまずペダルを取り扱うに当たって順序立てて丁寧に、生徒自身で考えることができるペダリングを教えなければならぬと考えている。しかし実際、自分自身で表現に合うペダルを考えられるようになるには、ペダルの技術だけでなく、様々な音楽的な知識が必要である。

しかし日本では子ども向けの易しいペダル指導の楽譜は少ない。子どもの学習者向けのペダル指導の充実は今後のピアノ指導法において重要であると考え、今回子どものペダル初学者のためのテキストを作成し、実際にレッスンをを行い、検討した。本研究は最終的に子ども自身が考え、自らペダリングを選択できるようになることを目的とし、その第一歩としてのペダル学習のためのテキストを作成し、その効果を検討するものである。

第1章ではペダルの種類、技法について確認した。また、現在出版されているペダルのための教本などを参考にペダルの指導法について考察し、テキストを作成した。第2章では、時代や作曲家ごとのふさわしいペダリングについて先行研究を参考にまとめた。第3章では作成したテキストを活用したレッスンの記録と、レッスンの初回と最終日に行ったアンケート調査から、学習者の変化を分析し、テキストの成果と改善点をまとめた。

第1章においては、ペダルはピアノ初学者が使う楽譜には出てくる頻度が少ないこと、また出てくる頻度順（レガートペダル→リズムペダル）ではなく、難易度が低い順（リズムペダル→レガートペダル）で学習を進めた方が良いことがわかった。このことから、ペダルの特徴に気づき、基本的な踏み方ができるようになることを目指したペダルのテキストを作成した。第3章の活用実践では学習者とペダルの関係に様々な変化がみられた。注目すべきは、ペダルによる音色と響きの変化をしっかりと聞き取り、自分のイメージと結びつけていたことである。さらに、ペダルが曲想にとっても重要な役割を果たしていることにも気づくことができていた。手の動きや、足の動きが複雑になると難しい点も見られたが、このようなペダルの特徴を感じ取るからこそ、自分自身で判断できるペダルにつながるものであると筆者は実感している。

本研究の調査の結果、これまで学習者A、Bはペダルへの様々な意識が弱かったことを再確認した。そして、テキストの活用によって、ペダルが表現ととても密接で重要であるとわかり、音が伸びるということだけでなく、音色や響きの特徴について理解した児童の姿を見ることができた。よって、ペダルに特化したテキストを使うことには有効性があると言えるだろう。今後はさらにこの実践を続け、テキストを改良していくとともに、自分自身の表現をより高めるためのペダルを習得するための道筋を探っていきたい。